

三の岳の記録

ながたに振興協議会

教育文化推進部会
編



発刊によせて

ながたに振興協議会長 赤 峰 映 洋

三の岳からの薫風が清流柴北川の水面を揺らす豊かな自然の中、私たちは今暮らしています。この度、「ながたに振興協議会」教育文化推進部会の手により、三の岳の記録を発行することになりました。

三の岳は長谷に住んでいる人にとっても、またこの地がふるさとの人にとっても母なる山に違いありません。

かつて、この三の岳には集落があり日々の生活を営んでいました。また古くからのしきたりや神事を大切に守ってきました。その記録を正確に後世に残すべく様々な資料を参考に作成しました。

過酷な環境の下、住民の方々は力強く生きてきました。その暮らしぶりや時代を知ることには非常に意義あることであり、これからの私たちの生活においても参考になれば幸いです。

終わりに 発行にあたり三の岳出身者の献身的なご協力に深く感謝申し上げます。



三の岳の記録 目次

発刊によせて	1
第一部 三の岳いまむかし	8
一 総論	9
二 各論	10
一 気候とくらし	10
① 四季	10
② 雨	11
③ 水利	12
二 地勢と農林業	14
① 水田	14
② 畑	15

第二部 三の岳物語

第一章	三の岳と共に生きる	31
一	三の岳とくらしや生業 <small>なりわい</small>	31
二	明治・大正・昭和時代の暮らし	33
三	長谷小学校校歌・応援歌	33
四	祭り	36
五	三夜講	37
六	雨乞い	37
七	ふるさとの山「三の岳」再発見	38
第二章	三の岳が「神の山」 といわれる由縁	39
第三章	豊薩の戦いと三の岳 (天面山・三ノ岳・栗ヶ畑城)	46

第三部 三の岳 史跡調査の写真

- ① 元金倉寺跡
- ② 現在の金倉寺
- ③ 樋口神社
- ④ 尺間嶽

あとがき



賑わっていた頃のなかよしパーク

.....
59	58	57	56	55	54

第一部



三岳いまむかし



「三岳いまむかし」元三の岳住民 大塚静馬氏著

全文要約 文責 安藤恒美

一 総論

昭和四十七年大飼町議会で三の岳という行政区が廃止された。勿論転出する人が増えて住む人が少なくなり行政区としての存在が機能しなくなつたのである。その後も幾人かは残っていた。仕事の都合上居住していたかまたは転居先から通つていたのである。村消滅の原因は、生活上不便な点が多かつたことである。物の生産や販売、生活物資や資材の購入、教育上の通学問題、病院通いの不便等三の岳人ならではの苦勞があつた。

太平洋戦争が終わると戦地から復員してきた人々で村も一時は賑やかになり活気を呈してきた。同時に戦後の食糧難の中で農産物の生産という有利さが生まれた。しかし、これも二・三年で変化し始めた。若者が都会へ流れるようになり、それも年々拍車がかかり、農村に過疎という状態が生まれた。昭和時代には戸数二十一戸、人口凡そ百二、三十人、耕地は田約五町歩、畜産では牝牛約四十頭で子牛年間生産二十頭、木炭生産約四千俵という状態であつたのに、人口減で

耕地は植林等で林野化し、山林は手入れが出来ず荒れ山となつてしまつた。

さて三の岳の起源については分からないが、相当以前から住んでいたことは確かで、地藏堂の現存や、水の元の下の方に刀鍛冶の七兵衛屋敷があり鉄屑らしい物をみたという古老の話も耳にしている。その他、屋敷平という宅地や畑地があつたことや、そこから瓦や陶器の破片が出たことも記憶している。

七十才で古稀を迎えた今、私は記念として在りし日の三の岳を一編の記録に残したいと鉛筆を握つた。後世に好奇心のある人や先祖が三の岳に住んでいた人、歴史家や文化財に興味のある人がこの書を読んで頂ければ幸甚に思う者である。

二、各論

一、気候とくらし

① 四季

標高三百五十一mの三の岳は春の訪れがやや遅れ、花も遅く咲くものが多い

った。しかし、夏は平坦地に比べ四〇五度低く凌ぎやすい。秋は降霜がなく北西の季節風も当たらず、朝日も早くから照るので過ごしやすい気候だった。但し、雪の降った時は積雪量も多く溶けてなくなるのに日にちがかった。高燥地帯といえるが、洗濯物は夜間に野外でも乾いた。蚕業の盛んな時代には桑の芽が晩霜の害を受けるなど皆無であった。初冬の初氷等も平地より遅れることは普通であった。以上の様に、人の住むのにも好い気候のせいか柑橘類も良く育ち、野菜をはじめ畑作物は良好、特に玉葱の良品のできることは町内でも有名な産地であった。三の岳という所は人の住むのには勿論、植物や作物等が生育するにも誠に良い地帯であったといえよう。

② 雨

高燥地帯であるがゆえに雨水の流失が激しく地下水が早くなくなり、湧水が減る等で夏冬とも早魃(かんばつ)には弱く、冬季降雨の少ない時期には飲料水も辛抱して使用することが多かった。夏季は降雨も多いので作物の干害は受けても飲料水に不自由することはなかった。風と云えばまず台風。台風の被害は大きかった。しかし、夏の時期の涼風は平地では味わえぬ気持ちのいい風が吹きと

おしていた。

③ 水利

最も苦勞したのは飲料水であつた。明治四十一年生まれの小生がこれまでの七十年間その辛苦をつぶさに見、体験してきた。水汲みの仕事の一端を担つたのは十才以前からであつた。当時の水汲みは、大人一人で水桶二個、子どもは一個を担いで運んだものだ。

毎日何荷という水が人の肩によつて運ばれた。一荷の水は小さい桶で一個に一斗、大きい桶では一斗五升入り、一人で二個担いで二斗から三斗(今の四十から六十リットル位か)、是を毎日誰かが汲み続けたものだ。一回の水汲み所要時間は近い家で十分、遠い家で三十分を要した。一戸当たり一日の必要量は、家族六〜七人、牛二〜三頭、それに風呂水等を入れると少ない日で二〜三荷、多い日は五〜六荷汲まねばならなかつた。それで水を大切にしていた。米を研いだ水や食器を洗つた水は全部牛馬に飲ませ、顔を洗つた水や風呂水は全て便槽に溜め、これを年に数回畑作物に液肥として使用した。時には雨水をも便槽に取り入れて肥料として使用することもあつた。この飲料水の水源は俗にイノコと呼ばれ

て地面より一メートルほど掘り込んで溜まった水を三和土や粘土等で塗り貯水したものだ。それが数ヶ所あつて所の名前や昔の地名でよんでいた。例えば、部落の西の裏山の裏イノコ、地藏堂の傍の堂イノコ（久保イノコ）、村の中央上部の腕イノコ、その下方のヒタイノコ、東北方向のヒユウガシイノコ、其の外個人所有の深井戸二か所、浅井戸一か所が使われた。冬の渇水期には夜間に水汲みをしたり、水の元迄汲みに行った人もあつた。これらの井戸は毎年旧の七月七日にそれぞれ所属の人によって掃除や修理がなされた。前記のイノコや井戸の湧水で百三十人程の人と四十数頭の牛が生活していたのである。

昭和の初め頃から終戦の昭和二十年頃には屋根水を利用して六軒が貯水タンクを造つた。鉄筋を使ったコンクリート造りで、砂やバラスは柴北川から運び上げた人が多く、可なりの労力と経費を要したことはいうまでもない。このタンクは住人のいる間立派に役割を果たしてくれた。その他貯水槽を造つて湧水や井戸水を揚水ポンプで水を溜め、水道管を引いて蛇口を使った水道に替えた人達もあつたが、此の頃から村からの転出者が多くなつて水道式の水利利用の期間はあまり永くはなかつた。

二、地勢と農林業

① 水田

殆ど山岳地帯の三の岳だが谷々には水田があり、特に部落の前方や東方の各谷間にあつた。字名で示すと、西の方から福手・堀下・郷谷・崩久保・穴尾・小又・赤伏木・畑ヶ迫・柿内・オサシロ・小岩・赤松・樋ヶ田尾等と呼ばれるところにあつた。その総面積約五町歩、枚数一反歩に二十〜三十枚、一枚の広いもので五〜六畝、狭い田は一坪或いはそれ以下のものもあるという有様で、耕作の労力と苦労は相当なものであつた。畦畔も広く周囲の山まで草刈りをしてそれを水田に鋤きこみ肥料とし、秋・冬場は干草として牛馬の飼料とした。稲作はあまりよく出来ず、化学肥料が使われるようになってからも反収は玄米に換算して二石内外であつた。三の岳の住人にとって水田耕作は重労働の作業であつた。その理由は第一に距離が遠い、農道が悪い、田の枚数が多い、畦畔が広い等々があつた。水田作業の日は昼食に弁当を持参し、小さな小屋をつくつてその中で食べる。耕耘や代掻きは牛を使った。脱穀は足踏み脱穀機が一部あつた。粃の運搬も

牛の背を使った。一回に靱俵二俵（一俵は靱四斗）、二頭引いて運ぶ人は一回に四俵、一回の往復時間は近い所で一〜二時間、遠い所は三〜四時間を要した。耕作面積の広い人は靱俵で五十〜六十俵であったので運搬も大変なものであった。水田の灌漑水は全て湧水または谷川の水を取り入れていた。そのため日照りが続くと旱魃の被害を受けひどいものであった。また、転出者が増え耕作放棄地が多くなると猪が出没して稲作を荒し収穫皆無の所も出る状態。依って昭和四十年頃には殆どが山野となった。

② 畑

三の岳はやはり畑作地帯である。人家の近くにあること、品質・収量の良かったことで農業の中心であった。面積も八町歩近くあった。西の方から字別に、福手・仲畑・堂・三嶽・久保・崩久保・尾羽根・柿内等にあり、一枚の面積も広い所で二反歩以上のものもあった。産物も総ての作物に適し、品質・収量等は長谷地区で最良の地であったことに麦類は収量も多く反当たり三〜四石も取れることもあり、また玉葱は土質や気候に適し格別の良品と多収で有名だった。

畑作の作業は楽ではなかった。主として人力による耕作である。傾斜地である

ことと土壌が固く重土であることで、常に耕土は土を少しでも上位へ揚げる形で行われた。鍬で掘るのにも上から下向きで土を掘り揚げる。踏み鍬すきの場合には特に三十センチから四・五十センチも持ち上げる。その上、時々下クロから上タロへと、策・フゴ・プリ等と名付けられた農具を使って人力でかつぎ上げた。それでも牛耕したり、大雨が降ったりすると耕土は下方にさがり、上方には平均して作柄が出来ぬ嫌いがあつた。畑作には常に家畜の糞尿のほか、厩肥と称する馬屋のこやし、それに人の糞尿は全部基肥及び追肥として使用された。此の畑地も人口の減少と共にほとんど山林化したのである。

③ 宅地

傾斜地にある部落ゆえ宅地はすべて石垣を積んで造られた。それも自然石ばかり。よくもこんなに石が持ち寄せられたものだと思う。掘り込まれて造った屋敷だけに庭も狭く裏側は高い崖の所が多い。大正初期の頃は西班に一戸だけ瓦葺で他は草葺きであつた。その後瓦葺が増えていくのだが、大正十年旧正月十八日十戸を残して十六棟が全焼した。以後次々に改築し終戦後殆ど瓦葺となつた。しかしこの時点で転出者が増え始め転居が始まつた。住宅改修の頃は車道もな

くどんな車も使用されず、瓦をはじめ必要な資材は牛及び人の背で運び上げられたものであつた。転出した人の家は空き家となりそのまま残つた。この記録を書いた頃にはまだ数軒が残り、常住者・時々居る人・全くの空き家もあつた。今更他所へ移すでもなく、買う人もいない。こうして数十年・数百年と経つ内には朽ちて人家の形跡もなくなくなる時も来るだろう。車道も開通してシイタケ生産に通う人もいたがこれも永久には続かないだろう。

④ 山林と炭焼き（木炭製造）・椎茸生産

山林は、松・杉・檜などの針葉樹林と柵林のある山林との二種類であつた。針葉樹は僅かで共有林が一部、後は個人で販売よりも万一の場合の建築材として所有していた。販売しても搬出に手間がかかるため安い値段で取引された。反対に柵林は重視され、昭和十六年以前の三の岳の柵林は実に立派に管理されていた。各家には一〜二頭の牛馬が飼育されていたので夏草や秋草は飼料として下草刈りがなされたのである。さらに二月から三月にかけて野焼きがなされた。四月頃には山全体が黒山となり、新芽の吹き出る頃にはワラビ・ゼンマイ等が生えてワラビ狩りで賑わつた。また副業として檜・樫・柵等の原木にして炭焼きも盛

んにおこなわれた。原木は主に柵が焼かれ、管理が良ければ年々材積が多くなり、管理悪ければ反対に漸次減少となる。良き管理はまず下草を刈り取る。その後、春の三月初め頃火入れして野焼きをして立派な柵林になる。これが年中行事である。しかしこの記録を書いた昭和五十三年頃には既に柵林が減少傾向にあり、行く行くは殆ど無くなるであろうとさえ思われた。製炭の盛んな時代には戸数約二十戸で年産四〜五千俵（一俵十五キロくらい）といわれた、価格は当時米一俵（玄米六十キロ）と木炭十俵、米十俵と牝の仔牛一頭といわれた。この比率は何十年と続いた。此の木炭収入が三の岳の経済を維持した。秋の稲の収穫と麦類の蒔付け作業を早く終わらせ、十二月から翌年の四〜五月頃迄木炭製造は続けられた。この期間は勿論弁当持参、朝出て夕暮れに帰宅する。白炭の場合、夜遅く或いは早朝未だ夜が明けぬ頃カマから出す作業をする時もあった。近い所で一〜二キロ、遠くは四〜五キロ以上も通った。製炭作業は二戸一組が多かった。男たちが主に製炭、女性又は家人が販売。この販売も大変な仕事であった。牛一頭に四俵を負わせ、一人で一頭又は二頭を引いて犬飼町の木炭問屋或いは現在大分市になつている田原の仲買人宅迄、遠距離のなか売りに行ったものだ。短い

冬の日の仕事で朝早く出て夕方、漸く帰宅する忙しさだった。木炭販売のほかに萱を切つて炭俵を編む。たわら編み用の小縄、俵締め用の大縄、地下足袋の無かつた時は草履作り迄もした。家庭でする仕事もかなり忙しい日々が続いた。

製縄は、大正の末期頃から製縄機が利用され昭和の末頃迄続いた。この様に製炭期間中は夏の農作業以上のきつい労働作業であった。炭焼きには焼き分けという分収の習わしもあった。例えば製炭目標四百俵の山を二人で作業するとして、その内二百俵は山林所有の地主に出す。残り二百俵を二人で分ける。作業日数は平等に出たとして地主の人は三百俵、もう一人は百俵となる。約半年を費やし毎日同じ作業をしてこれである。その上百俵取りの人は四、五月頃の木炭需要期を過ぎて低価格で売ることを強いられた。それだけ経済状態が悪いので止むを得なかつた。逆に地主は自家の納屋に積み込み、秋の薪炭出廻りの直前の年中で一番高価な時に売却するので収入の差は益々ひどくなる。ましてこの頃は価格も自由価格で、秋高・春安は毎年のことであつた。それが毎年繰り返されてきた。しかし、昭和初期になつて産業組合が創立され原木資金や生活資金の貸付、販売の斡旋等が行われるようになって収入の差が少なくなつた。木炭には白炭

と黒炭の二種類があつた。原木は同じだが焼き方が違ふのである。明治・大正・昭和初期までは殆ど白炭、その後少しずつ黒炭に変わり終戦後に概ね黒炭となつた。原因は黒炭の方が作業の難易や労力的に好条件であつた。

やがて、時代の流れで木炭から椎茸生産へと移り変わった。昭和三十一年の記録によると木炭一俵(十五キロ)三百十円。同じ量の原木で椎茸を作つた場合七百五十円の収入がある。木炭の倍以上の収益があるといわれた。昭和三十年以後日本経済の成長期に入つて物価比率が不均衡になつた。例えば、昭和五十三年に米一俵五千円だつたのが今は一万七千五百円で三・五倍なのに、椎茸はキロ当たり五百円が現在では五く六千円で十倍以上の値上がりである。椎茸生産に熱が入つたことは当然といえよう。この有利な椎茸生産にも前途に陰りが出てきた。その第一は原木が少なくなつたこと、後継者が少ないこと等でいつまで続けられるか不安になつてきた。現在、三の岳を転出した人で山に通つて椎茸づくりをしているのは十世帯(元居住者の約半分)ばかりはいるが二十歳台の後継者は一人もいない。

その他の林産物。松・杉・桧等の林産物は昭和三十年以前は建築材として自家

用を除き販売されるものは少なかつたが、其の後急速に多くの植林が行われた。殊に、転出後には宅地・畑地等は殆ど植林された。その上多くの山野が共有から個人へと分割されて是にも植林された。現三の岳部落の一带も数十年の後には見事な山林となるであろうと思つてゐる。

⑤ 畜産

三の岳の畜産は牛であつた。鶏は自家用として幾羽か飼われたが、卵・肉共に販売するものはなかつた。牛は牝牛の親牛が殆ど家庭で二頭、それに毎年仔牛が一〜二頭生まれる育成牛の居る家もあつた。飼料は主に田・畑のくろ切りや山林の下刈りの草で、それに製粉・精穀によるヌカ・フスマ等であつた。家によつては自家産の大豆・裸麦・大豆粕・等が濃厚飼料として使われた。仔牛の牝牛は木炭百俵、牡牛は五〜六十俵分に相当する価格で大きな収入源であつた。親牛は労役にも使われ、水田の耕耘、糶・干し草・薪・木炭・米麦の運搬作業に使われた。三の岳牛の評価が高かつたのは、地理的な条件による足の爪の丈夫さ・肉の締りの良さ等で町内でも有名な優良牛の産地でもあつた。この牛飼ひも転出家庭が多くなつて次第に有畜戸数が減り、ついに飼育牛はいなくなつてしまつた。

⑥ 養蚕

養蚕の始まりは、凡そ明治の末期頃かららしい。大正の末期頃には二十一戸中十八戸の家庭で養蚕がおこなわれた。土質のよさに加えて三の岳独特の現象で降霜のなかつたことで桑の芽立ちもよく繁茂した。したがって良質の繭が生産された。千歳村にあつた東陽館という養蚕業者による種繭も数年続き、三の岳の副業として大きな役割を果たした。しかし、太平洋戦争終了後漸次すたれ終に姿を消した。

⑦ その他の副業

煙草耕作も盛んに行われた。この始まりは養蚕よりもかなり古かつたようである。天日乾燥が長く続いていたが、昭和二十五年頃からは薪をたいて火力で乾燥するようになった。昭和二十五年頃までは多くの家庭で耕作されていた。煙草作は連作を嫌う作物なので原野の開墾も行ってまでも栽培された。その他の農作物としては、鉄砲百合や玉葱などの栽培が試みられたが収穫時期の重なりや遠方の販売先などの関係で自家用を除く以外は普及しなかつた。

三、教育

三の岳住民にとって教育は大きな関心事であった。筆者の私が思い切って転居した最大の動機も子どもの教育であった。住民の教育状況を回顧する時、長谷村立の小学校が出来る以前の人は千歳村の小学校に通ったという。四年制だったともいわれるがはつきりしない。三の岳から千歳まで片道八キロはある。子どもの足でよく通ったものだと思う。私たちの長谷小学校は小学六年、高等小学二年、女子部は更に二年の補習科があった。通学は、片道四〜五キロであったが道が悪く、雨天の時は子ども靴の無かった時代に下駄履では歩けないので下駄を手にとって素足で行き、恐ろしいようなまた嘘のような有様であった。晴れの時といえども藁草履では長持ちせず2〜3日で破れる。親の苦労も大変だったと思うが、私達も小学一年入学前にはこの藁草履作りを父から教えられ、自分で作って履いていた。昭和二十年の終戦頃までは村立の小学校以外の上級学校へ行く人は極めて少なかった。戦後になって教育の普及に依り多くの人が高校へ入学するようになり、親子共に此の教育に苦勞するようになった。殊に中学校が合併して犬飼中学校へ通学するようになってからは自宅から通学するのは不可能

になった。寮もないし下宿か親族・知人宅に通学させるかと切実な問題となって転出に拍車がかかった。でも、一挙に一家全員の転居も出来ず、子どものみが借家住宅で通学するなどの状態になった。従って中学校入学に備えて多くの人が自宅通学できるように転居したのであった。依って高校通学も自宅からできるような状況に変わった。やがて三の岳人の中からも東京・福岡・高知・熊本等の大学に行く人も出てきた。せめて幼稚園から高校までは自宅通学可能な地域でありたいものだとも思った。

四、行政

① 区長

区長・区長代理の選出も昭和の初め頃は任期四年で名誉職とされ容易に選出されたが、いつの頃からかそれが嫌われ避けられるようになり、選任されれば仕方なく受ける姿になった。任期も二年から一年ずつとなった。区長の仕事は増えるし手当は減るし、地区の用事で役場に行っても半日か一日を費やす。地域の生活状態はきびしくなり、責任は重くなるし、「名誉は要らぬ生活が大事」と考えるようになった。役場の都合で区長とか駐在員とか出張員とか名前は変わったが、

実質の仕事内容は何ら変わりなく、部落の統率・連絡事項・通達・重要事項の協議・税金の徴収・種々の選挙時には常に重要な役割が課せられた。仕事の辛さより報酬や手当の僅少はこたえた。でも、区長という伝統的な習慣は最後まで続いた。

② 隣保班長

この名前は太平洋戦争中につけられたように思う。三の岳は東西二組に分かれていて以前は組長と呼ばれた。祝儀・葬儀・屋根の葺き替え・労力援助等多くの行事があり責任も重かった。組長は区長に準じて組で選ばれたが輪番制であった。

③ 議員

村会議員と呼ばれていたが、後に町議会議員となった。次の三名が議員であったことを記憶している。

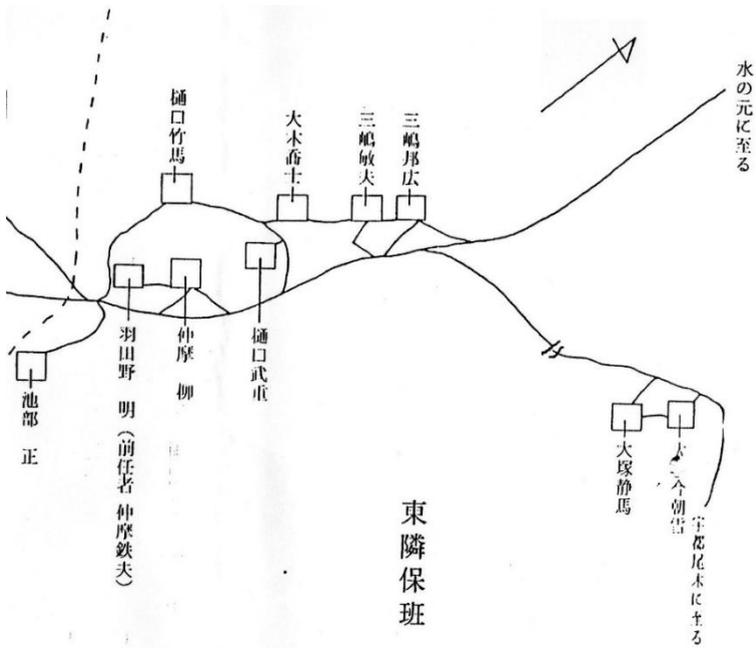
大塚伊三郎、三島力松、大塚里夫、大塚勘吾

④ その他

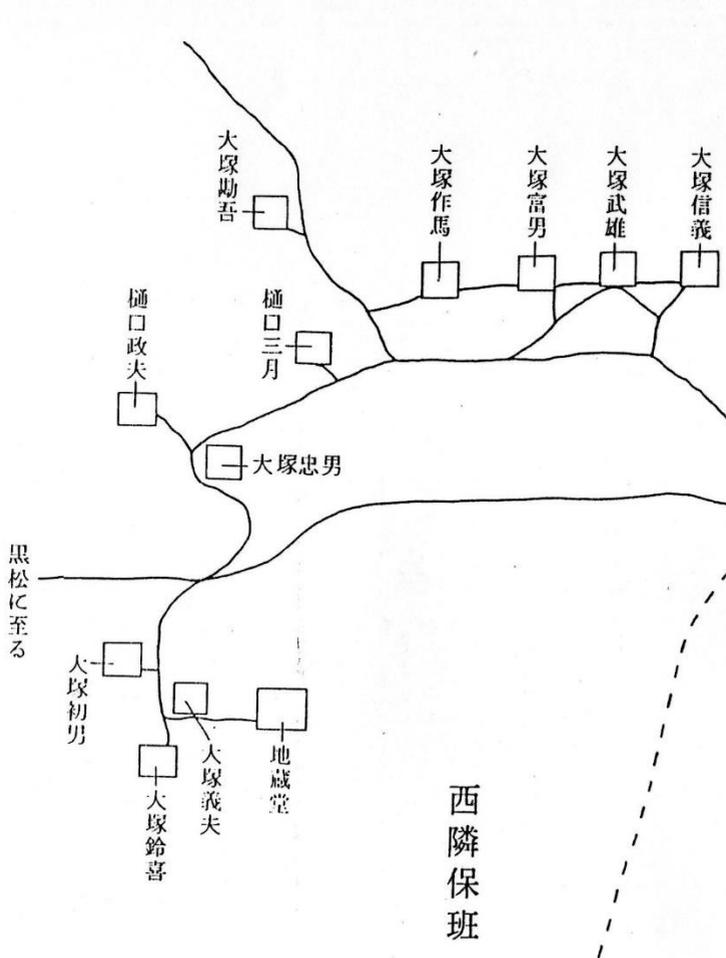
その他の役員及び職員として次のようなものがあつた。

婦人会役員 青年団役員 在郷軍人会役員 統計調査員 国勢調査員
食料調整委員 農地委員 農業委員 村農業会職員・理事 県木炭検査技手
学校の先生

五 三の岳当時の宅地図 東隣保班（原文記載）



五 三の岳当時の宅地図 西隣保班（原文記載）





おわり



三の岳
物語

編集 安藤恒美

第二章 三の岳と共に生きる

一、三の岳とくらしや生業なりわい

『長谷小学校開校百年史』に山田の大塚シズエ氏が「思い出の記」に次のように書いている。

「私は三の岳生まれですから、四キロの坂道を毎日歩いて通学しました。朝は下りですから三十分もかかりませんが、帰りは胸を突く坂道を一時間以上もかけて帰ったものです。(中略) 雪の時は、足袋にわらし、雨の日はハダシ、お天気の時はお草履をはいて通学。小さい時は父が作ってくれましたが、高学年になると自分で作ってはいませんでした。(中略) 高学年になると、学校からの帰りが一人になることが多く、暗い夜道を自分の足音にびっくりしてさびしい思いで一杯。力いっぱい走って帰ったこともありました。それもこれもなつかしい思い出ばかりです。長谷に生まれ、長谷で育てられ、八十年間を過ごしてまいりました。感謝の念で一杯であります。」

この一文に、三の岳の土地柄や人々の暮らしが凝縮されていると考える。

○ 江戸時代の史料から見える事

北村清士著『農民一揆』

じょうきょう

貞享二（一六八五）年 三四五年前の米の収穫高

柴北組 柴北 中 四百三十二石

葛川 中 百二十石

高津原 中 二百十四石

三ノ岳 下 五十四石

山田 中 百三十石

山野田 中 五十二石

宇津尾木 中 六十八石

黒松 下 二百五十九石

袖河内 下 五十二石

千束 中 九十七石

計 千四百七十四石（千石庄屋↓ 大庄屋）

○ 寛政十一年（一七九九）「村々産物之覚」古田家文書から

栗ヶ畑組 炭窯 すみがま 八

俵数 一六八〇俵 一俵二付一匁六分替

但し、五貫目俵、一窯に付七俵出来、尤も年中三十回、
○諸寺社への石高御寄進（寛政の頃、扶持米として）

三嵩村 光蔵寺 畑 六畝二十三歩

因みに、長畑 薬師堂 畑八升

二、明治・大正・昭和時代の暮らしについては

元、三の岳に住んでいた今は亡き大塚静馬氏の執筆による『三の岳いまむかし』という貴重な記録集が残されている。前項で紹介させていただく。

三、長谷小学校校歌・応援歌

大正時代の応援歌

一 北には三岳の嶺高く

麓に柴北の流れあり

古武士の意気に感じつつ

ふるえ長谷の健男児

二 井田郷健児多くとも

われらにまさらんものありや

いざたてふるえわが選手

ふるえ長谷の健男児

昭和九年頃の応援歌

渋谷政男作詞

北に峻峰水の元

麓を流るる一筋は

わが健脚の湯浴みする

柴北川の清流ぞ

(一、三略)

校歌

大正十二年 二宮ヨリ作詞

一、われらが学ぶ学び舎の

北にそびゆる水の元

弘法大師の古跡にて

その名も高き靈山ぞ

二、村の東を流るるは

柴北川の清流ぞ

千代つきせぬ清き水

あな尊しや山と川

三、思えば春の桜花

紅葉色どる秋景色

わが長谷の誇りにて

山水明媚の理想郷

絶句一首 「咏 三の岳」 木本桂靈作

日は山容を照らして紫烟しえんを生ず

幾重の山を抜いて望眺しん妍なり

黄鳥相啼ゆうがくいて幽壑ゆうがくに響き

弘法の遺跡湧泉を見る

妍ゆうがく 美しい

幽壑ゆうがく 静かな谷間

黄鳥こうちよう うぐいす

遺跡 残したもの・跡

四、祭り

地藏祭り

愛宕あたご地藏尊を祀る金倉寺で、祭日は正月と盆の二十四日に行われた。盆踊りや獅子舞が行われ、還宮の時は神楽も奉納されて賑わったという。三の岳の人々が下に降りて後は地藏様に集まる事は少なくなったが、人々の信仰は変わることなく、地藏様は立派に保存されている。

尺間祭り

水の元の山頂に祀られている。郡内は勿論、大分や臼杵の方面の海まで望める。信者は三の岳以外にも多い。縁日は未詳

大日様

であるが、盆と正月には村人が掃除をして、御花やお飾りを供えて読経を挙げ御祭りをしたという。百五十段以上ある石段は信者が一つ一つ運んで寄進したものであるという。尺間様と並んで山頂に祀られている。牛馬の神仏として知られている。盆と正月の二十八日が縁日という。

五、三夜講

毎月二十三日の夜、座を回って催された。

六、雨乞い

米の生産に欠かす事の出来ない取水に、農民は昔から大変な苦労を重ね工面してきた。多い水路の水漏れや水揚げ施設もない時代、谷川や堤等の水がめに頼らざるを得ない水田耕作であったからである。そんな中で最も悩まされたのが干害である。何か月も雨が降らず、田起こし・田植え・収穫まで必要な水がなく田は干割れ、作物は枯死して稲穂も出ず収穫ゼロ。何度も寄合をして相談しても天災には勝てずどうしようもない。遂に神力に頼り「雨乞い」に頼ることになった。まず氏神様に心経をあげ、参道の両側に松明をたいて祈願する。それでも降らないときは最後の手法で、三

ノ岳の頂上に旱魃にも水が絶えたことがないという清水の湧き出る「水の元」にお参りする。故阿南芳美氏の話によると、相談の結果村の代表が竹筒にお神酒をいれ、御供え物を持って三ノ岳に登って祈願したという。栗ヶ畑の人は神の山「三ノ岳」のご加護を待っている。村に帰った代表はお神酒を水の取り入れ口に注ぐ。その後お神酒と肴で村人総出で降水を祈ったという。願がかなって雨が降れば、「うろいよこい」といって休日にして氏神様に感謝し、酒を酌み交わし喜びあったという

七、ふるさととの山「三の岳」再発見

○長谷の有史以来、先人は神の宿る山として崇敬し、その大きさや恩恵に感謝し、山に生かされ、山と共に生きてきた事を改めて再認識する

○今を生きる私たちは三の岳と先人の偉大さに気づき、次代に正しく語り継ぐべき役割の有ることを認識し、可能な限り大切に保存・管理し、生活に活かしていく

○三の岳は、往古より宗教や時の中央政権、さらに国内にとどまらずヨーロッパ等と密接に繋がって今日が存在している

第二章 三の岳が「神の山」といわれる由縁について

山名「三の岳」の由来とれいざん靈山

○諸史料に見える山名の表記 三の岳・三嵩・三王嶽・山王嶽

一の岳、二の岳、三の岳と呼んでいたともいう

○標高五五〇メートル。尾根が南・北・東の三方に出ている。

○史料から『豊後国志』文化元年（一八〇四）に完成した岡藩の学者唐橋

世濟著

「三王嶽、井田郷柴北村にあり、峯列三層。幽邃

蔚秀（深く、人里離れ、樹木が美しく繁茂し、物

静か）。中にはいう廢塙（すたれた砦）あり」と記され

ている。

『古田家文書』寛政十一（一七九九）年の記録には「三

嵩」とあり、同様の記述がされている。

①

弘法太子（真言宗・空海）伝説の背景

伝説によると、平安初期の大同元（八〇六〜八一〇）年、今から一二二四年前）弘法太子は巡礼の為此の地を訪れたという。出会わせた青年に水を求めたところ、青年は快く引き受け三の岳の下の谷川の水を竹筒に入れ、息せき切って山を駆け上り太子に水を差し上げた。太子は大変喜んで水を飲み、青年に向かつて「この地に水がないのは不便であろう。わしが井を掘ってやろう」と、頂上から五十メートル下の窪地に金剛杖で二突三突つくと、清水が滾々と湧き出てきた。以来、この地に水の切れることは全くなくなった。そのためこの地を「水の元」と呼ぶようになったという。標高五百四十八・五メートルの頂上に水が出るようになって三の岳の人は申すに及ばず、長谷の村人はこの水を神仏の水として崇め、千年以上たっても水は絶えず今に続いている。

②

山王信仰の修験道場として（天台宗・最澄）

（郷土史家大先輩の故芦刈政治先生の説を引用させていただく。）

山王信仰とは、滋賀県大津市の日吉神社の別称で、最澄が中国の唐の国から帰国して比叡山延暦寺の地主神・守護神として祀ったことに始まる。古来、山王権現・日枝権現と称し、朝廷や幕府鎮護に結びつくときとされ、尊崇が厚かった。此の信仰を広めるために修験僧達が全国を修行行脚しながら布教したといわれている。したがって、中国の天台山信仰に始まったといわれる山王信仰の修行の道場として、わが三の岳を選んだと考えられ、それほどこの山は名山だったともいえる。

③ 「千灯籠」伝承と残存する石塔類から

京都で油屋を営む油屋の大豪商がいた。一人娘が難病にかかってしまった。病氣治癒を願って、京都の清水観音に三十三日間の丑の刻参りをした。満願の日、観音様から「豊後の国大野の郡三の岳に修験道場がある。此の道場の愛宕将軍地蔵尊あたごにお願ひすれば、必ずなおるであろう。」とのお告げがあった。娘はお供を連れて三の岳までやってきた。娘は、愛宕様に「病氣が治れば必ず千の灯籠を寄進します」と誓って祈願に入った。果たせるかな、さしもの難病も

見事に平癒した。娘は約束どおり千個の灯籠を造って愛宕様に寄進し、喜び勇んで京都に帰った。

この千灯籠も、大友氏と島津氏との戦乱で壊されたり、村の子どもの遊びで面白半分の下谷にせり落としたといわれ、殆ど失なわれている。三の岳に住んでいた人の話では下の谷には石塔類がたくさん埋没しているという。

因みに、『大野郡金石年表』によると金倉寺の境内には南朝年号である「建徳三辛子（一三七一）年三月」の銘のある宝篋印塔があり、相輪は無くなっているが現存しているし、付近には五輪塔等が数多く見られると『犬飼町誌』に記載されている。

④ 地藏堂「金倉寺」きんそうじから

愛宕地藏尊を祀る。もともとの山号は「高立山 金倉寺」であり、藩から給米を頂いている。今も瓦葺きの立派な本堂に複数の錫杖を持った菩薩像が安置されている。天井裏には赤い大きな傘やお駕籠があるが朽ちている。近くに宝篋印塔があり、「建徳三（一三七一）、六四（五年前）年壬子三月と記名されている。遠い昔から多くの人に信仰さ

れたことが分かる。

※城の尾羽根（峰の連なりの意）の石嗣せきし銘文から

高さ 一メートル四十八センチ、二段積みの基礎に屋根付き石嗣、

夫三嵩愛宕大権現者、往昔、万災消除為守護神修祭取、尋同所高立山
金倉寺本尊將軍地藏尊之岳跡而神徳新日新又日新、雖然中頃社頭破
壊、星霜経数百年造建之無節、惟時天明四甲辰、善男子郷中安全火盜
消滅之発請願石社一字再営者也、

（右側面）大願主 武藤吉兵衛尉

組長 田島佐太郎

森 和右衛門

清松清右衛門

（左側面）于時 天明四甲辰二月大吉祥日 石工佐平 田原村巖勝院閑人

銘之

玄如法印慎

（意識文）「それ三嵩愛宕大権現は、往昔（おうせき）、万災消除の

守護神として修め祭りを取り行う。同所を尋ねるに、高立山金倉寺本尊将軍地藏尊は高名な山跡にして、神徳日々新たかなり。然りと雖も中頃社頭壊れ、星霜（歳月）数百年を経ても造建の時なし。おもうに、時は天明四（一七七八）甲辰の年、郷中の善男子集まって安全・火災・盗難等の消滅の誓願を思い立ち、石社一字を再び拵えるものなり。」

この碑文から、霊山としての三ノ岳の様々な歴史事実や、遺産として長谷地区民がご加護を願い、厚い信仰心でもって大切に保存管理、継承してきたことが伺える。

「金倉寺」というユニークな寺号が珍しい。地域は勿論近郷近在の人々の五穀豊穡・災難除去と平穏無事の祈願所として参詣者が絶えなかったといわれている。

※愛宕将（勝）軍地藏尊（愛宕権現）

京都市右京区嵯峨愛宕町に鎮座する愛宕神社の本地仏として祀られたものである。都を守る神、火伏の神として修験霊場と共に庶民に信仰され発

展
し
て
き
た
。

三章 豊薩の戦いと三の岳（天面山・三ノ岳・栗ヶ畑城）

天面山（別名 てんめんざん 天連山・尼顔山とも）は標高四〇三メートル。今から四百三

十四年前の、天正十四（一五八六）年十月、島津家久率いる軍勢は、豊後の国に攻め入り、三重郷松尾城を根拠地として大野郡に侵入する。大友氏二十一代

の大友義鎮（宗麟）から宇目町の朝日岳城と野津町の星河を任されていた柴田紹安は、大友氏の冷遇に反発して島津軍に寝返り城を明け渡した。島津家久は柴田紹安に天面山を守らせ、妻や子を野津の星河城に閉じ込めた。

しかし、大友氏の反撃で星河城に閉じ込められている妻や子の命が危険になると、再び大友氏への寝返りの動きを示した。これを察した薩摩の軍勢は天面山城の柴田紹安を襲い、紹安や家来の武士を皆殺しにしたという。これが天面山の落城である。遠足に行った小学生が城跡で焼けた米を掻き出した思い出が今に伝えられているし、掻き出し禁止の標識も建てられている。

天面山城（天連ヶ城）を攻略した島津軍は、峯続きの三ノ岳城、栗ヶ畑城

（山内堡・小野城とも）で激しい戦いを繰り広げて攻め落とし、続いて鶴ヶ城（大南町）を攻撃、戸次河原の合戦で勝利し府内まで侵攻していく。

三ノ岳の戦いに関する史料として

○日本地名大辞典（角川書店）「天正十四年、島津氏豊後侵入の際、大友方の

の三の岳がこの山頂にあり、東方の天連ヶ
城と相応した」

○唐橋世濟著『豊後国志』に「廢塙あり千人塚というところあり」の記述が
見られる。

○畑ヶ川の原因山氏（もと春山）先祖塔「羽田野三左衛門元春、天正十四年、

合戦二打死」

○栗ヶ畑、甲斐家系図

○宣教師ルイス・フロイス著「栗ヶ畑の領主ペトロ」の本国宛て報告文書

○無量寺の銭がめと墓碑名、円行寺史、淨流寺文書に大友氏関係の記述がある

一、栗ヶ畑城と甲斐家系図

三ノ岳と峰続きになる栗ヶ畑城址は甲斐家の上であり、細い道を百
五十メートルも上ると山頂に着く。中央には深さ六く七メートルの掘
割があつて、二つの平らな結構広い平地からなる。多分二棟の館（や

かた)があつたものと考えられる。また、その山頂を取り囲むように
砦の下に平らな土地があり、「馬場」と呼ばれていたという。今は杉
の木が何本か植えられて見通しは良くないが昔は栗ヶ畑村を眼下に見
降ろせたという。上り着くまでの道では宋銭が多く見つかつており、
甲斐家に保存されている。今でも時々発見されるという。

甲斐家が城主の後裔と考えられるのは、同家に残る系図である。解
読出来る部分だけ記述しておく。

「○政次 武州(武蔵の国)箱崎ノ城主タリシガ、イサ、カノ事
アリ、鎌倉へ下り別奉行職ヲ仰セツケラル、二十五歳
(年)相勤ムル、

○甲斐弾正義秀 天正十四歳、大野郡岩戸ニテ打死

○弾之丞 この者親子トモ切支丹二候

栗ヶ畑小野城落城ノ後十五石高下サル

百姓家ヲ次(継か)

※栗ヶ畑の亀山墓地にキリシタン墓と見られる伏墓が十二基あり、
別府大学の詳細な調査が予定されている

二、ルイス・フロイス日本史 「栗ヶ畑城主ペトロ」

ルイス・フロイス ポルトガル出身のイエズス会宣教師。安土桃山時代の永祿六（一五六三）年に来日。足利義輝・織田信長・豊臣秀吉と親交。畿内や九州で布教。滞日中百四十通余の日本通信を本国に送り、又四十九年以降の布教史「日本史」を執筆。日本二十六聖人の殉教を目撃し、長崎で没した。

この南郡地方の栗ヶ畑という地に、キリシタンの領主である一人の貴人がいた。彼は府内で嫡子（大友義統）に奉仕していた。敵がやってきて、彼の妻、息子の嫁、下女たち、家財、その他、同家にあるすべての物を持ち去った。彼とともに戦場にいた他の家来たちは、妻たちが捕えられたと聞くと、主君を置いて全員が敵側に走った。領主は、自分に従うものは自分の乗馬と随伴してきた一少年以外に見ると、府内の学院に赴き、そこでデウスの愛によって

食物が施されている。

ペトロというこの領主には、二十二、三歳のジョアンと称せられる若い息子がいる。彼はかの場所に居合わせ、敵が自分の母や妻や家人を連行されるのを目撃して深い苦悩に耐えられず、山伏と称せられる、兵士から成るある宗派の一人の僧侶を襲撃できるかどうかと密かに家々の間から様子を窺った。その男は四百名の指揮官（カピタン）で、（ジョアンの家人）をとらえた張本人であった。デウス（ラテン語で天主）の御計らいとジョアンの幸運もあって、彼は望みどおりこの薩摩の指揮官が一人しかいなかったところを襲撃できた。彼に襲いかかる一人々が語るところによれば「ジョアンは左手で（相手）の首を掴み、右手で拔身の短刀を胸に突き付けて言った。

「貴公が拙者の母君とか妻や家人をいとも不正に拉致したのを目撃した後には、気も狂わんばかりであった。されば、早速彼らを放免し自由にされよ。さもなければかならず貴公を殺し、拙者もここで貴公とともに死ぬ覚悟である。（なぜならば）四百名の兵士の中から逃れ得ぬことくらい、よく存じている」と。

かの指揮官はいとも冷静かつ沈着な口調で、誰を呼ぶこともなく、かつ音を立てもしないで言った。「今日の敗者は明日の勝者。これが戦の習いというも

のだ。さればせつかく手に入れた獲物を手放すことはよろしくない。何はともあれすべては時が解決するであろう」と。

だがその僧侶は、かの若者に執拗にせまられてどうにもならぬ羽目に陥ったので、部下を呼び彼の母、妻および下女たちを釈放するようにと言いつけた。ジョアンは、彼女たちが十分離れた場所まで安全に移されるまでは安全を期して、(かの)僧侶を放免しようとはしなかった。(だが彼が)このように節度を弁えた取り扱いをしたために(敵)はその若者をもなんら危害を加えることなく放免した。

このジョアンの父の兄弟にパウロという教名の伯叔父がいた。身分の高い人で裕福であり、大家族を有していた。薩摩の兵士たちが豊後の諸街道を荒らしながら進撃してくると、親族や友人や隣人たちは、彼の保護を求めて同家に集合した。彼は、ある嶮山に屋敷を有しており、その背後は何人も突破し難い深山となっていた。

彼と結婚していたのはマグダレナという有徳の女性で、受洗してまだ日は浅いが立派なキリシタンであった。

敵は彼の(家の)戸口まで来ると、後で誰かが当家に害を加えることなきよう、当家が薩摩軍に属しているという書き文(かきぶみ)を与えたいから戸口

を開いてほしいと言った。だがそれは、彼を欺くための虚構であった。

敵としては、パウロが喜び穏やかに書付を受取りに出てくるものと考えていた。しかるに彼は抜刀してたちどころに二、三名を殺すと、ふたたび奥に引き下がり、急ぎ戸を閉めてしまった。

そして、山に通じる別の出口から、妻と二人だけで逃亡した。彼女が歩行するには二つの大きい障害があった。その一つは、彼女が肥満体で（身体）重かったことであり、他は山がいと深く（道に）不案内なことであったが、兩名は非常に苦勞してそれを突破することができた。

マグダレナは家を出た時、特に自分が愛情を注いでいるものしか携えなかったが、それは二つの肖像であり、一つはキリストの、他は聖母（マリア）のそれであった。折から嚴寒で、彼らは（より）よく歩けるように衣服を少なくし、（途次）脱ぎ棄てて行く有様であった。それでもそれら聖母だけは決して身体から離しはしなかった。彼らは荊棘（いばら）で身体を傷つけられて血に染まり、二日二晩山中を歩き通し、かくて疲れ果て精根尽きて清田の城にたどり着いた。ここでは国王（大友宗麟）の娘ジュスタが彼らを手厚くもてなした。その地のキシタンは皆、マグダレナ並びにその夫パウロの信仰と徳操に少なからぬ感銘を受けた。

※清田鑑忠

あきただ

大友氏の一族。清田郷（今の中判田、米良に及ぶ地域）の領主。宗麟の娘（長女で、嫡子義統の姉）ジュスタ（御料人と称する）が妻である。天正六（一五七八）にキリスト教徒になる。

※本史料は、中央公論社刊中公文庫全十二巻の中から「大友宗麟編Ⅲ」より抜粋。

大分県立図書館、豊後大野市立図書館のご協力で掲載。

三の岳 史跡調査の写真

教育文化推進部会にて

令和三年十一月 実施



元金倉寺 跡



現在の金倉寺



旧住居跡の石垣



樋口神社



樋口神社



尺間嶽



あとがき

安藤 恒美

ふるさとの山「三ノ岳」について関心度といえ、小学校の遠足の目的地や同級生達が山道を通学していた山くらいしかなかった。ところが昭和五十三（一九七八）年刊の『犬飼町史』編集委員として分担・執筆をしたことが転機で四十歳にして認識を新たにさせていた。十二名の編集委員諸氏と四か年に亘る史跡・石造物などの調査で三の岳をはじめ町内の歴史遺産がようやく再発見でき、深く脳裏に刻まれることになる。教職退職後犬飼町文化財調査委員として町内各自治区の史跡を現地探査したり古老の話を聞き書きしてきた。また、公民館の郷土史講座を受講する中で豊後大野市の歴史の大先達であった三重町出身の故芦刈政治先生に出会え、共に現地研修で天面山・三ノ岳・栗ヶ畑城跡を尋ねて説明を受け、いっそう歴史遺産としての大切さや価値を再認識することになる。折りしも今は故人となら

れた某映画監督が三ノ岳をテーマに映画化するという話を耳にして、改めて三の岳の歴史的価値の大きさや保存・継承の大切さを認識させられた。このように永年の三の岳との巡り会いを振り返ってみると、まさに三の岳のお蔭で郷土史研究の一人となり、大きく育てていただいたと思う。

さらに、今回「ながたに振興協議会」の事業として『三ノ岳の記録』を刊行することになり、これまでの研究調査をもとに原稿執筆の依頼を受け、小生の保存している史料や知識を活用するチャンスを頂きライフワークの一つともさせていただくことに厚く感謝申し上げます。また、かつて三の岳の住民であった方々や教育文化推進部会の方々と三の岳の史跡調査を再度実施して史跡の確認と更なる補充を図った。歴史ある霊山としての認識をメンバーと共有する機会となり、三の岳に愛着を持つ仲間が増え小生自身もいつそう造詣を深めることが出来たと思っている。此の冊子が、ながたに校区の住民や縁のある人々に愛読され、三の岳が永遠に次代へと継承されていることを願っている。

「ふるさとの山に向かひていふことなし、ふるさとの山はありがたきかな」

石川 啄木『一握の砂』より

教育文化推進部会 会員名簿

部会長：安藤邦男 副会長：穴見貞俊

部会員：安藤恒美 安藤好幸 大塚勝美 大塚憲則

岡田理恵 甲斐照昭 渡辺浩一郎

三の岳の記録

2022年(令和4年)3月 発行

編集 安藤 恒美・教育文化推進部会

発行所 ながたに振興協議会

大分県豊後大野市犬飼町黒松 1298 番地 1